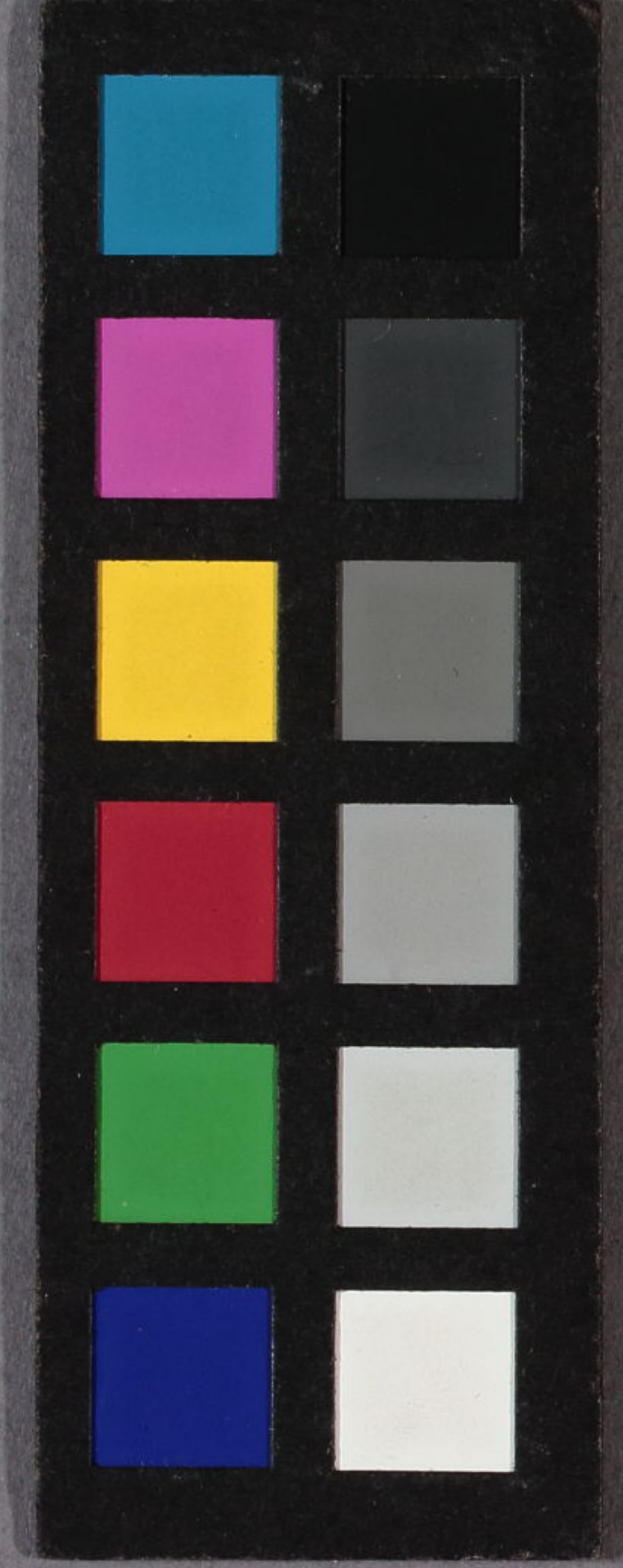


芭蕉翁詩集



俳諧集州第四集

掌中芭蕉翁發句集

江戸本石町十軒店 英大助

掌中芭蕉翁發句集

春之部

人を見ぬ春也かゝる英結うらめし
蓬萊に波々々や仔細結初便
うさかふな潮かゝるれも浦乃春
天津塩の等此はけり免々何佛
元日ハ昼迄寐る録喰もぐりぬ
二日あもぬらうるせしな花の春



真蕪心り少きを賣う川新菜水

後別

梅の葉まると六時宿乃らる計
まもやくき一歳らるのふ月を毒
山里々新菜返一む先乃花

細代長初の息よ何ふく

梅の本小ふ枝やせりきや梅の花
むめ。香小ののど思ひやう山路水

つねち境小抄ひく

えん小やくの片一ももや一梅の花
うらひまお笠落一とね桂うた
雪や柳乃う一後敷のま
うらひすや餅小糞生片梅の先
傘より押わけんを片柳うた
ふれ物より新柳乃志やうた
八九百年うくあふたやふきうた

猫乃慈やむ時團のおほ後月
獺かきつりらんく来よ瀬田乃奥
蛇喰ふて咬えおきろし維子乃奪
言時へ信傳りて奥の院より争ふ
わさうせき歌よそ後小然と傳されて
父母乃志きり小然し維子乃奪
むらうわく申孫孫子や維子の奪
永交目と鶴りあしぬひをりう船

栖玄孫辨小文彦小あり

そま替よりらん小やましく小詩うぬ
りつる小沈ふ落しそむく燕

規子の贊

あし魚や思は目沢的法乃綱
枯芝やまきさうあ乃一二寸

新大佛の記小文彦記あり
爰六る陽空きりしる孫らえ

糸もんまや敏手合ま珠敷の毒
ま五や蜂の巣はまを根乃洩
菜畠不花見教ま味ま老成
古流や蛙ま込正あま音
蝙蝠も出まうま世乃老ま音
花咲く七日露見教ぬま音
老成のり山ま目及乃物乃ま音
これ老成種ま上野ま漢ま音

葛城山の禁せり

隠えま音花小明り神乃教
花の陰るま音不似る旅音
支考の好御石首達と音
ひま音推ま老小又音一具
淋しま音老の何ま音のあま音
あはま音老乃ま音月教
四方より花吹入る音乃ま音

古き世の春あけゆく

とてゆく春あけいかに梅うね

春の夜をさくく小酌を仕暮り

木乃り雪を汁も繪もはらり

山詣あて何や申うーさうれま

夢郷乃流年をを流す沙丁か

さよ度をも人小儀りさく

茶能戸も住らぬ世を 雛乃春

山ふあややう流の焙炉の白ふ時

は悠くや山吹も流る 流の春

大和の柳の時

夢郎と宿うはあちや 春のまな

奥村のそ遠奥に細きふわり

り春や鳥啼一鳥の目をあさく

紀伊本物文鑑ふあり

ゆくを流やわあゆの満ちて 追付さ

夏之節

夏来るもまきと川原の紫水

旅人の吟

ひさし川流るるに身をぬるる

何と云ふに聲も横らふや

あつたすまのくは夏のむら

後集

何と云ふに大布多紙漉は月表

時鳥たうとや又尺五何を先

以たの海人の矢もを啼や子親

形次郎

所を横らるるにけしけし

素

灌佛の目も生れり小麻乃子

うの星やうと身物のなひ

鎌倉と生らるる出きん

うゑまや津の子藪よ老狐啼

落柿金

袖の花ふびう〜狐あふ料理の間
 筐とまゝと青糸ちう〜に茄子汁
 片〜これの雪吹落せ 大井川
 夕月〜う〜う〜ぬゆのや津田の橋
 まみ〜ま〜をわつめ〜ふ〜〜さね上川
 栗とゆふ文を西の木とき〜知方津ま

使りぬまの春葉落乃一生杖也

植ふもゆ木を羽のう〜と也

世乃人結見付ぬ花也 軒乃粟
 降乃とも非抄終日るを藁を笠
 清澗や波ふちり 辻む喜雲系
 世紙旅よふ後かく小田のゆ島
 白海の翠越

風流ゆ〜ゆ〜や雲の田う〜唄

早苗や侍多のりやむしあのみま
 田一投うへうまらけ新のり
 駿河路やそふま急も葉の白ひ
 眉掃成面鏡ありてあのをな
 わらけや敷をよるの別産を
 記り幸物又鑑小あり
 うしつり角物よりけり吹广の石
 月とあててもその多うにやす戸の夏

的石歌泊

蜻蛉やうらふまき夢成夏は月
 妻は言鼓あり
 夏草や花いそものともう申免乃跡
 紅蓮屋の記懐筆表小あり
 せんまのむ推の本もたり夏木立
 佛項禪師が庵をあらたて
 啄木も庵をあらたて夏木立

おとふたものせ夫へ侍るをいふ

おゆまへ人なりをいふ人等もあはれ

夕顔や種をいらく乃きくをい

ぬ鶉啼き人乃いそや佐左治り

と青の紙續猿蓑ふあり

夏の衣や崩まきく時一に平一物

正成像

おとくふふうく終なまきくや楠乃雲

木のけちてやそかあき鶉舟火
蓮の香は目とかがうは面乃鼻

柑渾二句

きけうさやぬり 死籠り合歡をい

夕晴やけうくうり 涼む波をい

十八樓の記後日記よあり

ひつくり目ふんや敷子のを皆涼

初涼なりとれき涼一瓜乃出

夕雨も物も待らぬ瓜乃茶
瓜の皮むきて中を食ふ也蓮蓬
瓜の皮むきて中を食ふ也蓮蓬
中にて死す一きりては蟬の聲
重なる響いりてあはれ月影山
異なる日を添へ入りてあはれ川
六月也峯ふ雪墨河~~~~山
七月也潮をめれとも塩く~~~~ら

秋之部

八月也ききみあはれ~~~~秋の萩
九月也八月也常乃秋もあはれ
十月也~~~~秋を食ふは秋のそめ
銀河の序風俗又選ふあり
荒海也佐渡小横~~~~河川
田舎の祝日~~~~
めさくちや置くと鏡おろし門乃垣

嵐巻る画小契のそとせれと

船り舟と下多れ幸さえわらまあり

あゝあ城あはさぬ萩のらねりか

旅館の吟

即ち何としか女も寐さう萩と月

ひらねく中程素きやせとあへ

硯くや拾ふやくほ交ふかゝる

乃の遠たむらけをる小吟れり

じうし字挟又版さく角力やうり

海人う歌を小唄ふまうほいとさ

えねむしのま城すうあふまはる

夏田の神社お宝物ふ実置う甲あはる

むしんやまかあとの下能きうくも

いあしまや園のうらめ又後の萩

まゝくともあふまのそとさうり

葉の戸を初れや穂穂をよさうり

桐の木よりうつら帰る蟻乃内
新書の目もいふ也書ぬやあき鶴
史の名乃ありともあしては千雀
蒼極く井は気幸乃あかえうを
本巻流とてはと

材やいのち強かき母をきつら
若き妻よりいふもあきつるは正流か
三日月や地をふらりる歌若き妻島

ありと何家あきつるは正流三日の春
藤橋記り風信又選ふあ
春をよし指をふ強もらあうら
紫の戸結ぬやそまう何まの坊
名月や門ふあし来る河かしら
名月や流せめらうそ歌もすうら
雪折く人世休れ月見うら
あうらあああああああああああ

名月弦巻うき足く後まきけ

月見絨和澤久操ふめり

采を向く友城ふみ乃月のお

三井寺の門出ちうちやまの月

名月やあつらみとも瀬田乃橋

十六秋をりつめり園のけしき

的ぼのや二十七秋も三ヶ乃月

松茸やあつぬ木のあつ魚こりけ

いひや啼り屍ぢうあー秋乃麻

あつくと日なほまきちうも秋の風

身あーとく大根のトー秋の愛

人の縁せりあつあつ世と流車なまれ

物心して唇はむーあつあつのう勢

瘦あつとわりなま菊弦はちえ

そやくさあ九回もやー菊乃花

山中や菊をまきとぬ師の白ひ

きくくのきくもきくもきくもきくも
菊の花はくくやもきくもきくも
白或くや目ふきくもきくも

十三歌

檜樹の枝はきくもきくも
猿の枝はきくもきくも
枯枝はきくもきくも
は道やけり人ちきくも

松風の枝はきくもきくも
小名木はきくもきくも

秋は流れてけりもきくも
けり秋やきくもきくも

瓢之流

山素堂

一瓢重黛山

自笑称箕山

莫慣首陽餓

這中飯顆山

歌公の垣はきくもきくも

惠子うつふ種ありも何して我ふ
 即ちのりひさこあり是れ多々み
 つちとて入はる器よせむとすれえ
 大ふしとりのふあはははくえり
 作らそとさ事どもむとすれあそ
 みるふれーあるひといちくま庵の
 いちー我羅入し支そのありとまを
 のめこのうぬある深疑やくてもあて

隠士素翁ふうふうこれと名を好む
 そのことえをむふ流す其のふれや
 力をたふすうゆふ田山やふ中にも
 飯顆山を社とする地ありと李白
 多と物事の句あり素翁李白
 うらうら我を負をきふくむや
 のらむれいふとれきちり乃 器
 たるはる時一壺千金せり

袋山もろろしとせむとあかり

もの即ち所瓢きうら或我よの那

芭蕉拙書出

冬之部

初しこれ猿も小篋とほくああり

記行本物文鑑よあり

旅人そ意念ふるまへんも何の時毎

宿りて名紙あふくまぬ時ああり

あうしに句ひや付しうらまは

こかしく小窓吹さう秋移るうら

根葉の腐あられあう急いあ儀

毎ちあ方よ荒く秋秋の落葉あ

病中此吟

旅よ病くああ枯燈とけけとあ

ああ秋あ破よる物あああああ

あああ乃園とあああああああ

舞ひくもくは月より遠くは
 林雪月の未沼津の歌塚初めは糸今也
 初雪多神も藤葉の日敷の那
 冬こそより又よりそむはは
 金屏紙巻所古片よ冬あかり
 住はくぬ藤紙あけ糸や壺巨燧
 風来ちふく

糸巻一ッ初又出——く藤藤式

麦生くくはかられ糸や 畠村
 鞠壺より小坊主糸あや大根引
 葱心く洗ひまきくははむさ
 塩鞠の歯く良も糸やし魚の尻
 葛の糸ふの表見やりりく初乃糸
 糸仙や白く隙子乃ととらうり
 糸菊や粉糠のか糸白糸端
 いらめく糸糸や何くれのひ糸糸笠

土川 雲や掛かりしと松檜の上
 初由美や水仙の葉の多りむ追
 こもかくもなほくても雲乃枯尾花
 采雲年々雲結袋やあけ路巾
 馬とさへ跡跡雲結河くまう家
 熱田 迂宮
 磨車は鏡も清く一雲乃それ
 日枝之上雲うけわさる雲結檜檜

いさゆ〜と雲乃〜と松檜のまきと
 箱根越え人もあ〜とと朝乃雲
 生々あ〜と雲乃〜と松檜のまきと
 去嘯松塚も免を結雲結袋や
 人々家々雲乃〜と我を多忘れ
 煤掃の脱小文庫にあり
 すとれや雲乃 宿乃 雲 斬
 有明も晦日年々〜と松檜のまきと

武州
今山口
腰越

何故に師走乃帝より馬
燦掃を己の柳津野大工の如
盗人小多ふと秋もわり逢の昔
奥を結ぶ程を知らぬ年迄と
旅の〜〜〜やうき世の燦拂ひ
今別の産を〜〜〜の暮

